

Shanti

公益社団法人
Shanti国際ボランティア会

2020.10.秋
Vol. 307
Shanti

巻末言 道



特集

新型コロナウイルスへの
Shantiの取り組み

ともに学ぶ

Shanti国際ボランティア会 専門アドバイザー
藤谷 健 朝日新聞 編集担当補佐
兼 ジャーナリスト学校デジタル推進担当部長

2004年の年末、インドネシア西端の町バンダアチェにいた。インド洋大津波の最大の被災地は、瓦礫で覆い尽くされ、死臭が漂っていた。住民の多くが家族や友人を亡くし、自宅を失い、着の身着のままに逃げていた。

その日も太陽は強烈な日差しを容赦なく浴びせていた。早朝からバイクの後ろに座席付き荷台のついたサムロー(三輪車)で取材していたが、昼過ぎに突然、朦朧とし始め、記憶が薄れていく感覚に陥った。熱中症だったのだろう。

すると運転手がペットボトルを渡してくれた。被災地では水1本が貴重だ。何度も礼をしながら口をつけた。生温かったが、身体に染み渡った。

同時に気づいた。水を受け取るまで、自分は取材する側、あるいは施す側におり、運転手は助けられる側にいる、と決め付けていたのではないかと。だがその関係性は一瞬のうちに逆転した。途上国との付き合いは40年近くなるが、自分の中に潜む優越感や「上下関係」の意識が、改めて透けて見える出来事だった。



筆者がミャンマーの移動図書館活動取材時の写真(2018年撮影)

Shantiについて初めて朝日新聞で書いたのは1995年。九州電力労組の研修に協力しているという内容だった。記事では参加者の日記の一部を紹介している。

<モン族の青年と交流。仲間が「村の皆さんは心の豊かさを持っている。組合活動が求めるものも、この心の豊かさだった。しかし、日本の経済発展はそれを失わせた。帰国したら、心の豊かさを取り戻す努力をしたい」と発言する。同感だ>

国際協力とは「相手から謙虚に学ぶ」、「自分ごととして考える」という姿勢に尽きるのではないかと、と最近よく考える。その意識がないと対等な関係を築くことはできない、と。

周りを見ると、いまなお「可哀想な人を助けてあげている」といった「正義」を振りかざす団体が少なくない。だがShantiからそうした「上から目線」を感じたことが一度もない。常に寄り添っているという印象を持つ。そんなところが存外良いのかも知れない。



新型コロナウイルスの感染拡大により、数カ月前には想像もしていなかった事態が日本を含め、アジア各地で広がっています。そして、私たちの活動地であるアジアの子どもたちにも、その危機は迫りつつあります。

コロナ禍において「新しい生活様式」の実践が求められるのと同時に、国際協力の現場でも新たな取り組みが必要となっています。シャンティが子どもたちの学びを守るため、アジア各国と日本で開始した新たな取り組みをご紹介します。

Shanti vol.307 CONTENTS

- 4 特集
新型コロナウイルスへの
シャンティの取り組み
- 16 世界の絵本を読んでみよう
「パヒロン(土砂災害)が来た」
ネパール 2018年
- 18 世界のおやつ旅
カンボジアのおやつ/ノムケルオ
- 19 世界の現場からAIRMAIL
From 活動の現場 & 現地の子どもリポート
▶カンボジア事務所
- 26 Shanti@Tokyo
- 28 シャンティな人たち
柴田 裕子
特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム 緊急対応部長
- 30 ファインダーをのぞいて
「紛争と教育」
- 31 お知らせ
- 32 道
ともに学ぶ
シャンティ国際ボランティア会 専門アドバイザー
藤谷 健(朝日新聞 編集担当補佐)



今号の表紙
ミャンマー(ビルマ)難民キャンプの図書館でマスクを着用している利用者
(2020年撮影)



街の中心にある道路の様子(ミャンマー・バアン)



国境近くの街の市場の様子(タイ・メーソット)

特集

活動国の新型コロナウイルス感染者数

国	感染者数	人口100万人あたりの感染者数	回復者数	死亡者数
カンボジア	225人	15人	143人	0人
ラオス	20人	3人	19人	0人
アフガニスタン	36,157人	1,122人	25,180人	1,259人
ミャンマー	350人	6人	290人	6人
ネパール	18,613人	621人	13,128人	45人
タイ	3,219人	49人	3,109人	58人
日本	29,684人	236人	21,567人	996人

出典 (Google News 2020年7月27日時点) <https://news.google.com/covid19/map>

新型コロナウイルスへの シヤンティの取り組み

なぜ新型コロナウイルス 対応事業を行うのか

新型コロナウイルスの影響により、世界中で困難な状況にいる人々、子どもたちは、さらに厳しい現実と直面しています。未曾有の事態で社会が混乱し、生活が困窮する人々が急増する中で、NGOの社会的役割が問われています。社会のニーズに応え、その国の政府の手の届かない地域や人々に迅速に必要な支援を届けることが今まさに求められています。海外の活動国においては、衛生用品や医療用品、食料などの救援物資支援、感染予防のための啓発活動、オンラインを利用した新たな教育文化支援活動、そして、継続した教育文化支援を行い、だれ一人取り残さない、一人ひとりの尊厳を守るための活動に取り組めます。



消毒の呼びかけ(ミャンマー)



人通りの減った観光地(ラオス・ルアンパバーン)

活動国への影響

シヤンティの事業実施国である、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、ネパール、アフガニスタンでは、2〜3月以降、新型コロナウイルスの感染者が報告されるようになり、感染拡大防止のため、各国で出入国制限措置の他、ロックダウンなどの外出禁止や移動制限措置が取られました。特に教育現場においては、学校が一斉休校となり、子どもたちの大切な学びの場所が失われました。シヤンティは、各国政府の通達に従いながらも、裨益者や事業関係者の安全を最大限配慮する形で、子どもたちに教育の機会を届ける活動を可能な限り続けてきました。



新型コロナウイルスへの シャンティの取り組み

アフガニスタン (4月)

村のリーダーや地元モスクの代表、政府関係者と綿密な調整を重ね、最も支援を必要としている生活困窮家庭を選定しています。小麦粉・米・油・茶葉・砂糖・豆など1世帯あたり10人分とし、少なくとも1カ月間生活できる食料と、石けん・手指消毒剤・マウスウォッシュ・フェイスマスク・手袋などの衛生用品を配布しています。従来行っている活動においても、スタッフは手袋やマスク、防護服などを着用し、感染予防対策を徹底した上で、調査や活動を行っています。



アフガニスタンで食料・ 衛生用品の支援を受けた家族

新型コロナウイルスがアフガニスタンにも蔓延し始め、都市は閉鎖されてしまいました。お金がなく、食べるものも買えず、自分たちもウイルスに感染するのではないかという不安な気持ちで日々を過ごしていました。そんな中、シャンティのスタッフが家にやってきて、ウイルスに関する資料や予防キットを提供してくれ、食料も配布してくれました。家族が安心して暮らせるよう手を差し伸べてくれた皆さまの支援に感謝しています。

ミャンマー (ビルマ) 難民キャンプ

感染を防ぐため、一時的に、シャンティの職員がキャンプへ入ることができなくなったため、他のNGOの力を借りて、図書館へ石けん・フェイスシールド・マスク・アルコールなどの衛生用品を届けました。4月20日まで図書館も閉館することになり、再開までの間、図書館関係者が図書館の部屋、蔵書すべてを消毒しました。



ネパール (4月)

海外から帰国した人々の一時滞在施設や病院で、帰国者や医療従事者が使用する感染予防物資を購入する資金が足りないため、資金提供を行い、防護服やマスク・手袋・消毒液・赤外線体温計などを提供しました。



左: 各自自治体の町長や村長に物資を渡している様子
右: 感染予防物資を提供したネパール・ヌワコト郡の景色



ミャンマー (ビルマ) 難民キャンプの図書館へ物資を受け渡している様子

シャンティの
新たな支援
活動紹介

「衛生用品・ 食料など物資の配布」

▼実施時期…4月5

▼対象国…ネパール、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ、アフガニスタン

移住労働者による送金が国民総生産 (GNP) の約3割を占めるネパールでは、感染者の多い欧米や中東、インドから50万人以上の移住労働者が帰国しています。帰国した移住労働者たちが一時的に滞在する施設や病院などで使用する防護服や消毒液などの医療物資、石けんやマスクなどの衛生用品が不足していました。

難民キャンプでは4月時点で感染者が出ていませんが、閉鎖的な環境で人々が密集して暮らしているため、一時キャンプは閉鎖され、医療と食料支援のNGO以外は入場できなくなりました。

アフガニスタンでは、長年に及ぶ紛争で故郷を追われた国内避難民や隣国へ逃れていた帰還民の

多くが日雇い労働で生計を立てており、生活が困窮しています。ユニセフは、栄養不良で命の危険にさらされている5歳未満児が2020年1月の69万人から、5月は78万人に増加したと発表しています。

日本を含む先進国では医療崩壊の危機が連日報告されていますが、医療制度が整っていない開発途上国や、閉鎖的な環境にある難民キャンプでは、ひとたび感染者が出ると、瞬く間に感染が拡大する懸念があります。感染が拡大した場合、社会や経済、教育へ与える影響は大きく、貧しい人ほど大きな被害と影響を受ける可能性があります。

ポスターやパンフレットを通じた 衛生啓発 (アフガニスタン)

感染予防の正しい知識を伝えるため、読み書きができない人にも理解してもらえるようイラストを多用し、カラフルな配色にした啓発資料を作成しました。また、道路沿いやガソリンスタンドのガスタンクなど、町のいたるところに横断幕やポスターを掲示し、啓発を呼び掛けています。物資配布時には、ソーシャルディスタンスを保って啓発活動に取り組み、石けんを使った手洗いの練習も行っています。



生活困窮者の生活環境



衛生研修に参加した
図書館員の声

シンサイ・センブッディ
(ラオス・ルアンパバーン市の図書館員)
移動図書館活動担当

私は村での読み聞かせや本の貸し出しを行っています。新型コロナウイルスは、誰もが感染する恐れがあり、感染予防対策は非常に重要だと感じています。衛生研修は、みな熱心に参加してくれ、非常に良い機会となりました。研修を通して、参加者が清潔にすることの大切さや手洗いの方法を地域の人々に伝えてくれることを願っています。

WHO研修を受講 (アフガニスタン)

シャンティ・アフガニスタン事務所のスタッフは、世界保健機関 (WHO) の新型コロナウイルスの予防対策研修を受講し、石けんによる手洗いや消毒用アルコールによる消毒の徹底、どのような感染予防知識を提供すれば良いかを学びました。

衛生研修の実施と「手洗いソング」(ラオス)

5月下旬、読書推進活動の対象校の教員と、県教育スポーツ局の職員やルアンパバーン市の図書館員らが参加した読書推進活動の研修を行った際、感染対策も含む衛生研修も行いました。研修では、ルアンパバーン市の職員から「手洗いソング」が紹介されました。授業前に子どもたちと歌えるように、長過ぎず、理解しやすい明るい曲で、手洗いの大切さややり方を伝えています。研修に参加した職員や教員たちも歌とジェスチャーを練習し、研修後は各学校や地域で実施したいと話していました。

新型コロナウイルス感染予防のため、日本でもソーシャルディスタンスや手洗い・消毒の徹底が叫ばれていますが、シャンティが活動する国や地域では、教育の機会を奪われ、読み書きができず、感染予防について十分な理解を得ることができない人々が少なくありません。アフガニスタンでは、多くの国内避難民や帰還民が劣悪な環境で密集して暮らしており、高い感染リスクにさらされています。彼らが暮らす地域では、正しい衛生知識や情報が伝わらず、「ムスリムは感染しない」「悪い行いをした人に感染する」「人工的に作られたウイルスである」など噂や嘘の情報が拡散しており、住民たちは不安の中での生活を強いられています。



国内避難民の中には寡婦も少なくない

ます。また、感染拡大により、定期的に行われていたポリオの予防接種が中断され、数年間感染がなかった地域で再びポリオの流行が確認されるなどの影響も出ています。さらに、腸チフスの患者も急増しており、人々の暮らしはますます悪化しています。

▼実施時期：4月
▼対象国：アフガニスタン、ラオス

シャンティの
新たな支援
活動紹介

「感染予防の啓発活動」

図書館活動の 新しい取り組み

1

デジタルライブラリー（カンボジア、ミャンマー）

カンボジアでは、これまでに絵本約120タイトルと紙芝居40タイトル以上を出版してきました。その多くは保存用の在庫があるのみで電子書籍化などはされていませんでしたが、この機会に「絵本の電子書籍化」と「読み聞かせ動画の制作」を進めました。

ミャンマーでは、他団体と協力しながら、ミャンマー国立図書館や出版社のウェブサイトにシャンティが出版した絵本を掲載してもらい調整を開始しました。



カンボジアで出版してきた絵本の一部



電子書籍の公開サイト（カンボジア）

厳選した絵本を電子書籍化して専用ウェブサイトに掲載。カンボジアの通信機器の普及率は携帯電話118%、インターネット75%（三菱UFJリサーチ&コンサルティング2018年調べ）と高く、多くの層へアクセスが可能であると考えています。



スマートフォンで電子書籍を閲覧している様子



担当スタッフの声

ヤンナイ
(ミャンマー)

この活動は、初めてのこのため、何をどのように始めればいいのか最初は戸惑いました。インターネットを利用できない子どもたちに読書機会を届けられるかが今後の課題ですが、子どもの読書を通じた継続的な学びを支えることができる取り組みだと考えています。これを機に、より多くの子どもたちを楽しんでもらい、ミャンマーに限らず他の国の出版図書も紹介できたら良いと思っています。



スマートフォンでデジタルライブラリーを閲覧しているカンボジアの人々

シャンティの
新たな支援
活動紹介

「図書館活動の 新しい取り組み」

▼実施時期…4月～

▼対象国…カンボジア、ミャンマー、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

カンボジアでは、新型コロナウイルス感染症防止措置の一環により、2020年3月16日より国内すべての教育施設が閉鎖されました。閉鎖する前からカンボジアでは、午前または午後のみ授業を行う2部制の学校が多く、ASEAN諸国の平均学習時間の半分程度しか確保できないことが課題とされてきました。子どもたちの学ぶ機会が減少し、教育問題が深刻化したことを受け、教育青年スポーツ省はカンボジア国営テレビに専用チャンネルを開設し、初等教育のテレビ放送を開始しました。

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプで運営している図書館は一時閉鎖され、再び利用してもらうた

めには、感染予防に注意を払い、新しい利用規則や従来の取り組みを見直す必要があります。また、キャンプ内では、地区を越えた移動が禁止されたため、図書館を再開しても通えない人がいます。

従来の教育や図書館活動のやり方を転換することはもちろん、学校や活動地への訪問が制限されたため、オンラインを活用したコミュニケーションが必要とされています。そのため、絵本の出版や読み聞かせ、図書館活動など、これまでシャンティが長年培ってきた経験とノウハウを活かし、「絵本の世界」に接する機会を子どもたちへ届けるための新しい取り組みを各地で開始しました。



キャンプの図書館でマスクを着けてゲームをしている様子

図書館活動の新しい取り組み 4 | 図書館での取り組み (ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ)

安心して図書館を利用できるように、衛生用品を活用した新しい利用規則を設け、図書館員たちが検温したり、手洗いを呼び掛けています。本の貸出は続けていますが、外に頻繁に出ることを心配する人がいることから、貸出冊数を増やし、貸出期間を延長することにしました。返却され、図書館に戻ってきた本は、図書館員が必ず消毒をした後に配架しています。また、情報提供活動として、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)からの新型コロナウイルスに関する情報を情報掲示板に掲示し、啓発に努めています。これらの取り組みを通じて、少しずつ利用者が戻ってきています。



読み聞かせ

子どもたちへの読み聞かせ活動は少人数の場合にのみ実施し、読み聞かせをする際に図書館員は必ずフェイスシールドかマスクを着用しています。



手洗い・検温の様子

図書館に入る前に図書館員が非接触型体温計で体温を確認します。また、入口に設置した手洗い場で手を洗ってから入館してもらいます。



図書館員同士の練習

図書館は一時的に閉館されましたが、再開に備え蔵書を消毒したり、図書館員は互いにスキルアップのため絵本の読み聞かせの練習を行いました。



カンボジア(上)とミャンマー(下)の読み聞かせ動画配信用のYouTubeチャンネル

図書館活動の新しい取り組み 2 | オンライン移動図書館 =読み聞かせ動画の配信 (カンボジア、ミャンマー)

車やバイクなどに本を積み込み、学校や村を回り、絵本の読み聞かせを行ってきた「移動図書館活動」をオンラインで届ける取り組みを開始しました。これまでシャンティが出版した絵本や紙芝居を読み聞かせている動画を作成し、他団体とも連携し、SNSを通じた発信を行っています。読み聞かせ動画はクメール語、ビルマ語で作成され、YouTubeで視聴できるようになっています。

図書館活動の新しい取り組み 3 | オンライン研修 (ミャンマー)

ミャンマーでは児童図書出版委員会を発足し、現地の作家やイラストレーター、編集者らと協力して絵本や紙芝居の出版を行っています。これまで年に一度、児童図書の専門家を日本から派遣して、委員会のメンバーを対象に研修を行ってきました。しかし、新型コロナウイルスの影響で専門家がミャンマーへ渡航することが難しくなったため、オンライン研修を実施しました。



日本の専門家とミャンマーの会場をオンライン会議ツールでつないで研修を実施



図書館利用者の声

ノー・シー・カリヤ・ポー (20歳)

感染予防対策を盛り込んだ新しい利用規則があるので、図書館に行くことに不安を感じなくなりました。入館前に手を洗って、体温を測ることは、利用者の感染予防になり、とても大切なことです。また、これまでよりも長期間、多く本を借りることができるので、とてもうれしいです。人との距離を保つために図書館に行く回数を減らしても、本を借りることができるからです。難民キャンプの他の社会サービスも同じように感染予防対策を提供してくれたいと思います。



ドーティンティンウイン (編集者)

オンライン研修の経験はありませんが、新しいアイデアをこれまでの研修同様、得られることを期待し、ベストを尽くしたいです。

マニンプエ (作家)

オンラインでの研修は初めてのため、不安もあります。講師に直接会えないのは残念ですが、児童図書に関するさらなる知識を得たいと思っています。

ウーソーゾー (イラストレーター)

研修を中止することなく、オンラインで参加できることはありがたいです。講師の指導と共に絵本制作における新たな知識を得られるよう励みたいと思います。

オンライン研修 参加者の声



児童図書出版委員会のメンバー



長野県松本市で絵本やワークキットを贈呈する茅野常務理事

まとめ

NGO
with
コロナ

シャンティ国際ボランティア会 事務局長

山本 英里

世界的に拡大する新型コロナウイルスの感染の中で、教育の機会の存続や子どもたちの心の癒しのために、シャンティが支援する絵本や図書館活動は活動の形を変えながら届けられています。この危機的状況の中においても一冊の本が持つ力を改めて教えられた気がします。

4月7日、日本での非常事態宣言を受け、シャンティは難しい決断を迫られました。普段は海外事務所を後方支援する役割の東京事務所でも、対応が必要になりました。職員の安全確保と海外のサポートを継続できる体制構築と、すべてが初めての経験でした。この状況下、組織の安全管理としてまず取る対策は、在宅勤務、徹底した自粛というどうしても「防衛」に集中しがちになります。一方、状況が長引く中では、「抑制」「減災」措置と組み合わせる必要が必要があります。な

ぜなら、シャンティの存在価値は、会のミッションである「最も困難な人々に支援を届けること」であり、それができなくなれば、私たちの存在意義がなくなってしまう。ある国の職員は、「餓死する子どもを見捨てて行う感染予防対策はNGOの対策ではない」と言い放ちました。自らを守り、支援活動による感染拡大という2次被害を防ぎながら支援を継続する、そのためにどうしたら良いか、日本も含め各国で葛藤の日々が続いています。

私たちの最大の懸念は、紛争、災害の後、長い年月をかけて貧困の連鎖を断ち切るために築きあげてきた教育の基盤が、コロナ禍の中で再び崩れていくことです。日本でも今、教育の在り方、貧困の深刻化などの壁に直面している中、日本以上に脆弱性の高い国々では危機的状況に陥りかねません。

国連大学の報告によると、今回の新型コロナウイルスの影響で多くの国が10年前、国によっては30年前の状態に後退し、2018年から比較し、およそ4〜5億人の貧困人口の増加が予測されています。厳しい状況にあった人々はさらに困難な生活を強いられています。

コロナによる感染拡大や経済危機の課題は、もはや各国だけで対応できる課題ではなくグローバル課題になっています。これまで以上に、他国に目を向け、感染対策、貧困対策などを強化していかなければ、この状況を脱却していくのは難しいでしょう。渡航制限などが続く中で寄り添い、つながり続けることはかつてない挑戦です。

シャンティのこれまでの各国での経験を活かし、この状況下にこそ国内外で子どもたちの希望と笑顔を絶やさない活動を継続していきます。

シャンティの
新たな支援
活動紹介

「たのしく学べるおうち時間」

▼実施時期：6月

▼対象国：日本

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、日本の子どもたちも環境の変化に慣れない日々を過ごしています。長く続いた休校や再開における分散登校、授業短縮などの措置により、学校以外の時間が増えることで、家庭環境による教育の格差が問題となっています。

そこでシャンティは、家庭で過ごす時間が増えた子どもたちの健康や心のケアを目的に、家で楽しく学べる時間を届けたいという想いから、普段触れる機会が少ない世界の子どものためのことを学ぶことができる、オリジナルワークキットや絵本、文房具などを配布しました。

特に、ひとり親家庭、生活保護家庭、外国にルーツのある家庭、被災家庭の子どもたちを対象に、

過去にシャンティと事業を一緒に行った経験のある団体を通して、2020年6月からワークキットを配布しています。

子どもたちには、絵本を読んだり、動画を見ながらワークシートに取り組んでもらい、感想文や絵を特設サイトで掲載し、他の子どもたちにも共有する場を設けました。また、小学校高学年以上の子どもたちには、「絵本を届ける運動」への参加を通じて、世界の子どものための社会貢献活動を体験してもらいました。

※当事業は、公益財団法人パブリックリソース財団内ゴールドマン・サックス緊急子ども支援基金とREADYFOR新型コロナウイルス感染症・拡大防止活動基金からの助成と皆様のご支援を受けて、実施しています。また、同封した文房具の一部は、株式会社学研ステイフルより寄贈いただきました。



封入の様子



配布したキット

QRコードと「たのしく学べるおうち時間」動画、特設ページのリンクが示されています。

世界には私たちが“あたりまえ”だと思っていることを自由にできない子どもたちがいる。だから、みんなのためにできることがあれば、小さなことでもいいので協力したい。たった1つのことのせいで、多くの人が犠牲になり、悲しい気持ちになってしまう。だから、そういうことが身の回りで起きないように、まず自分が友達や家族と楽しく毎日を大切に、命を大切に生きていきたいと思う。(小学5年生)

参加した
子どもの
感想

パヒロン（土砂災害） が来た

今回は紙芝居のご紹介です。
2015年に大地震が発生したネパールで、学校の防災能力強化事業に取り組み、防災紙芝居を出版しました。それまでネパールには紙芝居自体ありませんでしたが、今、子どもたちは初めて見る紙芝居を通して学んでいます。



1

激しい雨が降る夜、アミスタは家族と眠ろうとしていました。「なんだか怖いなあ。早くやんでくれないかな」

2

夢では、茶色くて不気味な生き物が向かってきました。「俺様はパヒロンだ〜！森も、木も、家もまるごと飲み込んでやるぞ〜！」



3

パヒロンは大雨が降ったときや地震が起きたときに現れます。土砂崩れや土石流を起こし、とても危険です。



4

パヒロンが来る前には、ゴロゴロという音が聞こえることがあります。おかしいことがあったら、山の斜面や川、崖から離れることが必要です。



5

森の木は、雨で土が流れ出すのを防いでいるのです。パヒロンが現れないために、木を切りすぎないことも大切です。



6

次の日、アミスタは家族に昨日の夢の話をしました。アミスタたちは家の周りに危険なところがあるか、見に行くことにしました。



紙芝居を読み終わった後、子どもたちに以下の質問をして、災害への理解を深めるようになっています。

- ・土砂災害はどんなときに現れるのでしょうか？
- ・被害を減らすため、私たちにできることはなんですか？

etc

世界の現場から

AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、
アジアの各国で活動する
ボランティアの様子や
スタッフを紹介します。

From Cambodia

カンボジア事務所

政情も落ち着かず、内戦で人々の心が
疲れぎっていた1991年に、事務所を
開設。2019年までに278の校舎を建設
してきました。衛生環境の向上を含めた
学校整備活動を進める現在の活動を
紹介します。



◀ 子どもの1日をレポート!

カンボジアのバタンバン州バンサイ・トラエン村に暮らす11歳の少女の1日をレポート。新型コロナウイルス感染拡大前の日常を紹介します。



ものづくりの舞台裏をレポート! ▶

子どもたちが絵本に興味を持つきっかけづくりのため制作しているおはなし動画。「ペープサート(人形劇)」制作の裏側をのぞいてみましょう!



カンボジア事務所
ファリナさんの
おすすめおやつ



カンボジアのおやつ

ノムクルオ

នំគ្រុក

スープをつけて食べる 明石焼き風のおやつ!

「チヨムリアップスオ(こんにちは)」「フムクルオ」は米粉やココナッツミルク、ナンプラーや砂糖、ネギを混ぜた生地を丸い形に焼いたスナックで、日本の明石焼きに似ているそうです。これを、お好みでナンプラーとココナッツミルク、唐辛子を混ぜたタレにつけて食べます。お店で買うと、キュウリやミント、ドクダミ、バジルなどのハーブのつけ合わせもついできますよ。熱々で食べると、外はカリッと、中はトロトロとしています。道具を近所の人に借りて、家で作ることもあります。マーケットや屋台で販売されている、小腹がすいたときに、食べたくなるスナックです。



カンボジア事務所の幼児教育事業を担当しているファリナです。



たっぷりのハーブと一緒に、タレにつけて食べます

Hot Topics



1 学校が閉まっている間の子どもたち

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全ての学校が一時的に閉鎖されました。子どもたちは自宅で教育省がテレビやインターネットを通じて配信した授業動画を見て勉強しています。また、ときどき先生が生徒の家を訪問しフォローアップを行っています。しかし、貧しい家庭では、自宅学習の機会を確保できず、家族の仕事の手伝いをしなければならない子どもたちもいます。



2 活動への新しいアイデア

同僚たちと一緒に水耕栽培システムのトレーニングコースに参加しました。将来、コミュニティへの普及促進活動を通じて、より安全で安定した生産ができるよう練習と試験を行っているところ です。

3 学校支援委員の声

学校支援委員会のメンバーのひとり、すべての子どもたちが、適切な教育を幼稚園や小学校から受けられるようになることが夢だと話します。「新しい校舎で教育を受けることは彼らの将来にとって貴重なチャンスとなります」との声を聞くことができ、やりがいを感じました。



カンボジア事務所
学校建設プロジェクト・スタッフ
チャン・サイハーさん

PROFILE

大学卒業後、水衛生、母子保健、コミュニティ開発分野などの活動を行う団体に勤務した後、2019年入職。思いやりの心を大切に日々業務を行っています。

子どもたちに環境の良い学校へ通える機会を
学校建設は、子どもたちに安全で衛生的な学びの環境を提供すると同時に、学校スタッフや学校支援委員会による効果的な学校マスタープランの実施をかなえる事業です。子どもたちが将来、社会や地域の発展、家族の生活向上に貢献できる力を身につけられるよう、今後支援の手を広げていきたいと思えます。



Cambodia
カンボジア

バタンバン州
プーサット州
プンベン

From Cambodia

カンボジア事務所

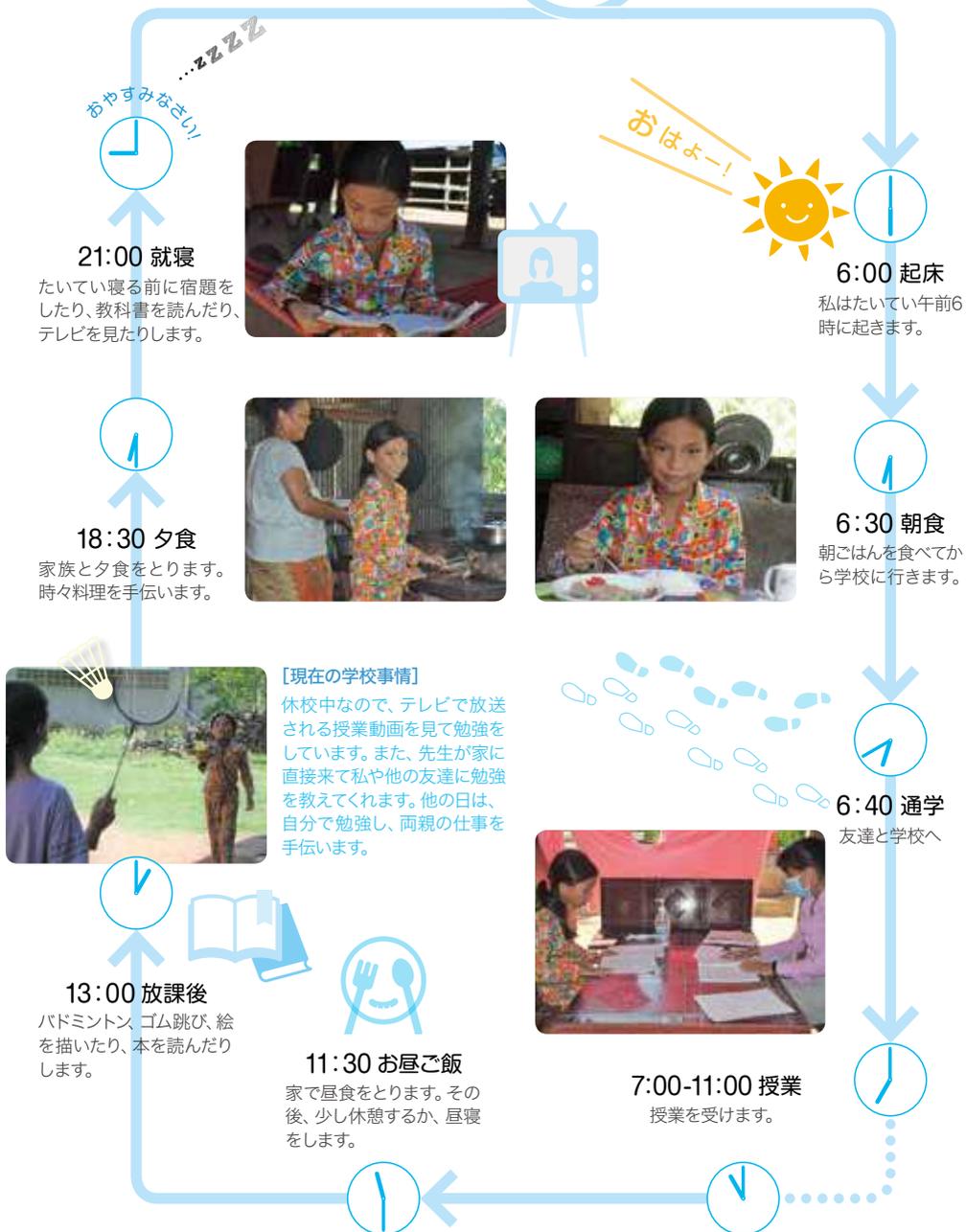
1991年に事務所を開設して以降、278の小学校と幼稚園の校舎を建設し、2020年は新たに4校の建設を進めるカンボジア事務所の現在をレポート!

学校の建設作業に加え
校内環境の向上を目指して

現在、私たちはプーサット州のヴィール・ヴェン郡で2校、バタンバン州のパベル郡で2校の建設を進めています。学校建設のほか、校内環境向上のための植樹活動やトイレ研修会の実施、環境に優しい下水設備など衛生環境の向上を含めた活動を行っています。

活動対象地域のヴィール・ヴェン郡は、政府や団体の支援が届きにくく、トタンや廃材を使用した簡素な木造校舎の学校も多い場所です。また、子どもたちの多くが学校へのアクセスが困難なへき地で生活しており、特に貧しく、生活環境が厳しい子どもたちの中には、思うように通学できず、留年や退学する子どもたちもいます。地域内にある28の学校を調査し、いまだ学校建設の必要性が高い学校が多数あることが分かりました。

私の1日を紹介します!



私が住んでいるのはこんな村



バットアンバン州は、国の「ライスボウル」として広く知られています。バンサイ・トラエン村は米の栽培が盛んで、多くの人が稲作に従事しています。オレンジの果樹栽培に従事している人も多です。市場のヌードルスープ、お粥、コーヒーは有名で、訪れた際にはゆっくり堪能してほしいです。

From Cambodia / カンボジア事務所 現地の子どもリポート

新型コロナウイルス感染拡大により、すべての学校が休校し8月より一部再開となったカンボジア。支援対象地域に暮らす少女のこれまでと今の生活を紹介していきます。

カンボジアから ボン・スレイアックさん(11歳) がリポート!



将来は小学校の先生に!
休校中も毎日勉強に励んでいます

バットアンバン州のバンサイ・トラエン村のバンサイ・トラエン小学校に通う5年生です。おじいちゃん、おばあちゃんと家族7人で暮らし、米の栽培や小さなオレンジ果樹園、牛や鶏の飼育で生計を立てています。将来は、自立して家族をサポートしたいと考えています。地域の子どもたちを助けるような仕事をしたく、小学校の先生になることを夢んでいます。夢をかなえるために、本を読んだり、先生からの宿題をしたり、スポーツをしたりと、毎日勉強に励んでいます。新型コロナウイルスにより学校が閉鎖されていますが、自宅に先生が週に1から3回来て教えてくれるので、自習をしながら勉強を進めています。



私の お気に入り

「友達や家族と過ごす時間」

バドミントン、ゴム跳び、サンダルを投げるゲームなどを友達と過ごす時間が好きです。よくクメール語の教科書を読んだり、絵を描いたりして過ごしています。ほかに祝日など特別な日に豪華な料理を食べたり、家族と過ごすのも好きです。

舞台のウラ側



1 おはなしを決める

これまでカンボジア事務所で出版した絵本の中からおはなしを選びました。

2 登場人物をつくる



作り方はシンプルで、厚紙や段ボールなどにイラストを貼り付けてカットし、裏面に割りばしなどを固定します。オリジナルで絵を描くときもありますが、今回は一部をのぞき絵本のイラストをコピーしてそのまま利用しました。

(注：著作権はシャンティが保持しています)

3 「ペープサート」の舞台をつくる

段ボールと発泡スチロールで主人公のお家とお庭の舞台も準備しました。



From Cambodia / カンボジア事務所
ものづくりの舞台ウラ

「ペープサート」づくり

子どもたちを読書へいざなうためのおはなし動画を制作しているカンボジア事務所。動画で使用する「ペープサート」制作のウラ側をのぞいてみました。



オモテ舞台



制作秘話

ストーリー選びは特に重要!

ストーリーはいくつかのポイントに気をつけて選んでいます。1つ目は「登場人物が少ないこと」。演じやすく、子どもたちが分かりやすいことが重要です。2つ目は「登場人物に動きがあること」。制作した「かくれんぼして遊びたい大きなペンの実」は、主人公の女の子がペンの実を探して四方へ動き回るおはなしで、ペープサート向きです。3つ目はおはなしをイメージしやすいように「20ページ以内であること」。そして最後に、見やすさを意識し、実際に「ペンの実のサイズ」を大きくしました。

子どもたちにストーリーへ興味を持ってもらいたい、絵本を読むきっかけをつくりたい、私たちは、子どもたちに絵本に興味を持ってもらうきっかけとして、ペープサート（紙人形劇）を利用しています。現在はシャンティ職員が子どもたちの前でおはなしを披露するのではなく、幼児教育の質の改善事業など、教員や図書館員向けにはなし研修を行う活動が中心となっています。その中で、ペー

私たちは、子どもたちに絵本に興味を持ってもらうきっかけとして、ペープサート（紙人形劇）を利用しています。現在はシャンティ職員が子どもたちの前でおはなしを披露するのではなく、幼児教育の質の改善事業など、教員や図書館員向けにはなし研修を行う活動が中心となっています。その中で、ペー

プサートやエプロンシアター、パネルシアターなどの小道具の作り方などを教えています。動画の撮影時は、今回は、子どもたちの前で直接おはなしを披露するわけではなく、子どもたちの反応を見られなかったので少し緊張しましたが、動画が公開されて、視聴者の反応を聞くのを楽しみにしています。

在宅勤務と自宅周辺の再発見

4月から毎週2-3日の在宅勤務になりました。最初は会話もなく一人で仕事することに違和感もありましたが、通勤時間がなくなり空いた時間をウォーキングやジョギングにあてています。自宅近くの多摩川ではカルガモやサギ、タヌキなど動物がいっぱい!これって本当に東京?



小林さん
お気に入り
アイテム

「Access」&「Excel」と
モンベルのクリアボトル

IT業務には欠かせないソフトウェア「Access」は、大規模なデータベースからデータを読み込み、集計やデータを加工する際に使います。「Excel」は支援者への送付リストを作成するときに必須です。郵便番号や住所の修正、文字数の調整に便利です。入社したときから愛用しているモンベルのクリアボトルは、広口で軽量なのでとても使い勝手がいいです。季節によって500mlと750mlを使い分けています。



在宅勤務のこともあり、デスクトップ型パソコンからノートパソコンに移りました。今まで使用していたデスクトップ型は画面が大きかったのですが、ノートパソコンは画面が小さい! IT担当として職員の皆さんに「デスクトップはすっきりきれいに」と言っていた私自身も有言実行! 見てください、この画面を!

PROFILE
小林 裕司さん

メーカーのシステム開発部門に勤務し、eラーニング教材の開発などに携わる。2016年3月に入社しIT担当として勤務。モットーは「シンプル・イズ・ベスト」。何事も簡素で見栄えが良いのが好き。



業務改善のためITスキル
向上のサポートを

「シャンティでIT担当?」と疑問に思う方も多いと思いますが、主な業務は、支援者情報の入力と管理、パソコンの設定および不具合対応、ウェブサーバーとメールサーバーの運用管理などを行っています。例えば、2016年に熊本地震が発生した際には、現地で活動する職員のノートパソコンの通信設定やモバイルルーターの手配をしました。

一般企業では、IT業務には複数の職員がいますが、シャンティでは私一人だけ。何かあったら自分が必ず解決しなければならぬので責任重大です。実際に日曜日にウェブサーバーが停止したり、メールが届かなくなったり「ドキッ」とするようなトラブルもありました。東京事務所内のトラブルなら直接確認することもできますが、海外事務所から依頼が届くこともあります。こういった場合、一つひとつ状況を確認し問題を解決していきます。その場では解決できないこともあります。ありますが、内容が困難であればあるほど解決したときのやりがいや喜びは大きく感じます。職員からの「ありがとう」の一言が仕事へのエネルギーになっています。

IT技術によって、皆さんが本来の仕事に集中できる時間を増やすことが理想です。そうすることで、職員が支援者や支援先の職員との時間を増やすことができ、結果としてアジアの子どもたちや支援を求めている方への支援や協力を膨らませていくことができます。と思います。



2018年 西日本豪雨災害の現地調査の様子。(岡山県倉敷市真備市にて2018年7月撮影)

特定非営利活動法人
ジャパン・プラットフォーム
緊急対応部長

しばた ゆうこ
柴田 裕子

2003年より日本のNGOに勤務。アフガニスタンでの駐在経験を経て、パキスタン地震やスリランカ紛争後の事業立ち上げに関わった他、イラク、シエラレオネ、リベリア、南スーダン、東ティモールなどにおける人道・開発支援、ハイチ、パキスタン、東日本大震災など国内外の災害支援に従事。2012年にジャパン・プラットフォーム(以下、JPF)に入団し、主に海外での人道支援への助成事業、各アクターとの連携調整などを統括。2017年4月より現職。国内外での緊急支援を担当。

はじめてシャンティと一緒に仕事をしたのは、前職のNGOで東京本部のアフガニスタン担当をしていた時でした。当時、邦人の現地立ち入りや活動する複数のNGOが協力してガイドラインの作成や政府への呼びかけを行っていました。その活動の中心メンバーにはシャンティの山本英里さんもいて、共通の課題と想いを共有する仲間がいることを心強く思ったことを思い出します。

その後、2012年にJPFへ入団してからは、シャンティとはJPFの加盟団体として、さまざまなプログラムで一緒に活動しました。印象的なことのひとつに、タイでの思い出があります。2013年からJPFは「ミャンマー少数民族帰還民支援プログラム」を実施しました。2011年にミャンマーで民政移管が進み、武装組織との停戦、和解放進展し、タイと

国境を接するミャンマー・カレン州での帰還促進と準備に取り掛かりました。JPFは同地域での活動は初めてだったため、少数民族を取り巻く複雑な状況を理解することから始まり、長年タイ側の難民キャンプで活動されていたシャンティからさまざまな情報をいただきました。

私も、タイの難民キャンプの図書館を訪問させていただき、キャンプ内のシャンティが運営する図書館で、子どもたちへの読み聞かせの様子を拝見しました。読み聞かせに聞き入り、目を輝かせて楽しそうにしている子どもたちを見て、さまざまな制限のある難民キャンプの中で、とても救われた気持ちになったことを覚えています。

JPFは直接、支援事業を実施しているわけではありませんが、一つの団体ではできないことを加盟団体と一緒に進め、個々の事業やNGO全体を良くしていくために議論

できることが良いところだと思っています。

JPF加盟5団体が実施した「アフガニスタン人道支援プログラム」では、JPFは事務局として防災減災能力強化の事業を実施しました。アフガニスタンの関係者が防災減災の知見を深め、今後の防災活動に活かすため、国家災害庁、現地NGO、加盟団体の現地スタッフら合計29名を日本に招聘しました。シャンティからも現地スタッフが2名参加してくれ、各団体の防災の取り組みを発表し合い、東日本大震災での日本の取り組みを学ぶため、仙台市や東北大学災害科学国際研究所を訪問しました。石巻市では地元の方からお話を聞く機会を得て、当時の苦労や地元の取り組みを知ることができました。最終的にJPFはアフガニスタンの国家災害庁と災害時の協力協定を締結することができました。また、参加したNGOや現地スタッフが

帰ってからも相互に情報共有を続け、現地主導での防災事業の実施に繋がりました。この事業は、各NGOの皆さんのご協力のおかげで参加者全員の学びと、特に現地で活動するスタッフのさらなる活動に繋がる事業になったと思っています。

私は日本のNGOセクター全体の底上げというテーマを常に念頭に持って活動に取り組んできました。現在、JPFでNGOセクター全体に関わることができ、これまでの人道支援の経験を活かすことができていると思っています。

シャンティには、これまでの経験を活かし、今後もよい事業を続けていただきたいのはもちろん、JPFの加盟団体として、NGOセクター全体を引っ張っていく存在になっただけならうれしいです。

シャンティからのお知らせ

令和2年7月豪雨被害の支援

7月に日本各地で発生した豪雨で被災した熊本県と福岡県に職員を派遣し、被害調査と支援活動を行っています。被災地域では、新型コロナウイルスの感染予防に注意しつつ、被災地域の関係団体と連携し、現地のニーズに沿って復旧復興を後押しする支援活動を実施してきました。



★国内

郵便振替：00170-8-397994

加入者名：SVA緊急救援募金

*払込取扱票の通信欄に「令和2年7月豪雨災害」とご記載ください。

*振込手数料はご負担をお願いいたします。

設立40周年キックオフイベントのご案内

「現場主義を貫いた40年 ～変動するアジアの今～」

皆さまのおかげで40周年目を迎えることとなりました。これまでの活動から得た学びを共有し、変動するアジアの現状をお伝えするオンラインイベントを開催します。

日時：2020年12月12日(土) 14:00～17:00

プログラム：

第1部：八木澤克昌(アジア地域ディレクター)と有馬嘉男氏(NHK報道記者)の対談

第2部：海外事務所からの中継、ファシリテーター 山本英里(事務局長)

人事のお知らせ

●入職

木村 沙弥香 経理課 経理及び総務人事担当(7/1)

●退職

川村 圭 カンボジア事務所 コーディネーター(7/10)

栗原 陽紀 事業サポート課 海外事業担当(7/17)

伊藤 杏子 ミャンマー事務所 プロジェクトマネージャー(9/18)

●異動

浅木麻梨耶 事業サポート課 →ミャンマー事務所(9/1)

●復職

眞屋 友希 アフガニスタン事務所(東京勤務)(7/1)

編集後記

6月から、月に1回オンラインイベントを開催しています。これまで、海外事務所スタッフが来日したときにしか聞くことができなかった話を、インターネットを通じて直接聞けるようになりました。「新しい生活様式」を制限として考えるのではなく、新たな可能性と捉える発想も必要だと感じています。(召田安宏)

シャンティ 2020年秋号(通巻307号) | 2020年10月1日発行

発行人：若林恭英

発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220

WEB：www.sva.or.jp E-Mail：info@sva.or.jp

編集人：山本英里、鈴木晶子

編集・制作：株式会社文化工房

印刷：株式会社サンエー印刷

当会への寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



川畑 嘉文(フォトジャーナリスト)

Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨てて写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。



1年生のクラス。二人はこの授業を受けていた。



上：家路につく子どもたち。

下：放課後、村のため池で遊ぶ少年。

紛争と教育

ミャンマー(ビルマ)難民の帰還先として開拓されたレイケイコー村の小学校を訪れると、教室が足りないらしく、低学年の児童たちは多目的ホールで授業を受けていました。その中に、中学生ぐらいの顔立ちをした少年が二人。歳は13だと言います。国内避難民だったと話す二人はずっと前に小学校を退学してしまいました。理由を尋ねると「働くため」だと言います。目を合わせようとせず、どこか答えたくないさそう。無理強いすることもできず、インタビュアーを切り上げましたが、あとで校長先生が教えてくれました。

二人はカレンの武装勢力に所属する少年兵だったため学校に通うことができませんでした。停戦が訪れ、ようやく落ち着いて勉強する機会を得たのです。

